

ヒトのことばと鳥の歌

ジュウシマツやカナリアなどのある種^{しゅ とり なわ ば}の鳥は縄張り^{しゅちよう}を主張^{きゆう}したり、求^{あひ}愛^{うた うた}のときに、まるで歌^{うた}を歌^{うた}うかのようにさえずる。次^{つぎ}から次^{つぎ}へと新^{あた}しい「歌^{うた}」を覚^{おぼ}えた結果^{けつ}、100以上^{いじよう}の「歌^{うた}」が歌^{うた}えるまでになる鳥^{とり}もいる。鳥^{とり}はヒトと同じように、音声^{おんせい}という手段^{しゅだん}を使^{つか}ってコミュニケーションをとって

いるのである。では、鳥^{とり}にとっての「歌^{うた}」とヒトにとっての「ことば」に

ちが

違い^{ちが}があるのだろうか。

ヒトの「ことば」と鳥の「歌^{うた}」の習得^{しゅうとく}過程^{かてい}において、似^にている点^{てん}が三^{みつ}つ

あ

挙げ^あられる。1点^{てんめ}目は、まねるという経験^{けいけん}を通して「ことば」や「歌^{うた}」の

がくしゅう

学^{がく}習^{しゅう}をするということである。ヒトの子供^{こども}は聞^きこえてくる周^{まわ}りのことばを

しゅうとく

まねることで「ことば」を習^{しゅう}得^{とく}していく。鳥^{とり}も同^{どう}様^{よう}の過^か程^{てい}を經^へて、「歌^{うた}」

うた

が歌^{うた}えるようになっていく。つまり、成^{せい}鳥^{ちよう}の「歌^{うた}」を一度^{いちど}も聞^きくことなく

そだ

育^{そだ}った鳥^{とり}は歌^{うた}うことはないのだ。2点^{てんめ}目は、人^{にん}間^{げん}の子供^{こども}も幼^{よう}鳥^{ちよう}も繰^くり返^{かえ}

れんしゅう

し練^{れん}習^{しゅう}することで、「ことば」や「歌^{うた}」を習^{しゅう}得^{とく}していく。人^{にん}間^{げん}の乳^{にゅう}児^じ

おんせい

が、「バブバブ」などの音^{おん}声^{せい}を繰^くり返^{かえ}すのは幼^{よう}鳥^{ちよう}が最^{さい}初^{しよ}に「歌^{うた}」の一部^{いちぶ}分^{ぶん}

く

を繰^くり返^{かえ}すのと同^{おな}じだ。3点^{てんめ}目、人^{にん}間^{げん}の子供^{こども}も幼^{よう}鳥^{ちよう}も新^{あた}しい「ことば・

うた

歌^{うた}」をたや^{がく}すく学^{しゅう}習^{じかん}できるが、大^お人^{とな}や成^{せい}鳥^{ちよう}は子^こ供^{ども}に比^{くら}べて学^{がく}習^{しゅう}に時^じ間^{かん}

にんげん

がか^{おや}かる。人^{にん}間^{げん}の親^{おや}子^こが同^{どう}時^じに外^{がい}国^{こく}語^ごを学^{まな}び始^{はじ}めると、子^こ供^{ども}のほ^はうが早^{はや}く

じょうたつ　　し　　とり　　おな　　い
上　達することはよく知られているが、鳥にも同じことが言える。

　　しゅうとくかていいがい　　に　　てん　　とり　　うた　　ほうげん
また、習得過程以外にも似ている点がある。鳥の「歌」にヒトの方言に
あたるようなものがあり、同じ種類の鳥でも、せいそく　　ちいき
生息している地域によって
うた　　かた　　こと
歌い方が異なる。

　　とり　　うた　　こと　　てん　　とり
しかし、ヒトの「ことば」と鳥の「歌」とには異なる点もある。鳥の
うた　　なわば　　しゅちょう　　きゅうあい　　うた　　たい
「歌」は縄張りの主張や求愛のために歌われるのに対し、ヒトの「こと
ば」はそれ以外のさまざまな目的にも使われる。また、とり　　うた　　おと
鳥の「歌」では音
じゅんばん　　か　　うた　　い　　み　　か
の順番を変えても「歌」の意味が変わることはないが、ヒトの「ことば」
では、たんご　　じゅんばん　　か　　ぶんしょう　　い　　み　　か
単語の順番を変えることで文章の意味が変わる。

　　こと　　しゅ　　とり　　おんせい　　しゅだん　　つか
なぜ、異なる種であるヒトと鳥が音声という手段を使ってコミュニケー
ションをとるようになったのだろうか。とり　　き　　うえ　　は　　えだ　　しかい　　さえぎ
鳥は木の上では葉や枝に視界を遮
られ、コミュニケーションの相手が見えなくなってしまうので、おんせい　　しん
音声を進
か　　かんが
化させコミュニケーションをとるようになったと考えられている。ヒトに
どうよう　　てん　　せつ
も同様な点があるのではないかという説もある。